

# 私の履歴書

谷口 吉生

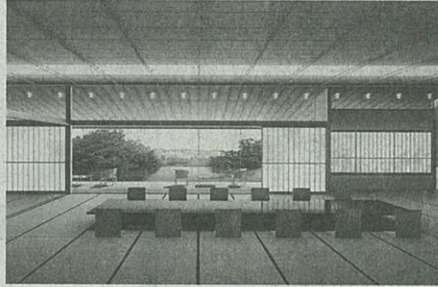
金沢市の寺町、崖下に犀川  
を見下ろす一面に、建築と都  
市のための小さなミュージア  
ムが誕生する。完成は201  
9年の予定だ。  
金沢市は、藩政期  
の建築、レンガ造り  
の近代建築、世界に  
名だたる現代建築ま  
で、実にさまざま  
建築物が点在する「建  
築の町」だ。そうし  
た建築や都市に関する文化を  
広く発信するため、金沢市が  
「建築文化拠点施設」の設立  
を構想し、私は父の生家が立  
つ寺町の土地の寄贈を申し出  
た。金沢へのささやかな恩返  
しは、金沢市名誉市民の第1  
号となった父が長年考えてい  
たことであり、私が設計を任  
されたことになった。建築や

法規といった制約の中で理想  
の建築を求め、検討を執拗に  
繰り返すがゆえ、協働する多  
くの方にはご負担をかけたか  
もしれない。建築が完成する  
までのすべての過程に直接、  
参加できるように、事務所の組  
織は小さく保ってきた。しか  
し所員の独立は奨励したの  
で、40年で延べ60人を超える  
スタッフが在籍。プロジェクト  
ごとに最適な外部コンサル  
タントとも組み、こうしたた  
くさんの協力者の方々と共に  
走り続けてきた。

## 建築と都市の小美術館

父設計の作品を再現し展示

東京・赤坂の迎賓施設、遊  
家にも生まれることで人より早  
く走り出すことはできたが、  
心亭は主に海外からの賓客の  
ために使用されるが、金沢に  
より高いハードルが待ち構え  
ていた。改めて振り返ってみ  
ると、差し引きゼロの建築家  
人生だった気がする。



金沢市「建築文化拠点施設」2階の完成予定図

「私の履歴書」で父のこと  
を思いふんじたが、建築家  
の長男に生まれたことには葛  
藤もあった。建築の「技術」  
は継ぐことができて「芸術」  
は継げない。常に比較される  
対象の父とは異なる設計を心  
がけ、新しい創造のために考  
えを巡らせてきた。陸上競技  
にたとえるならば、建築家の  
もできる。  
④

私は模型を通して建築を考  
える。模型作りは3次元のス  
ケッチのようなものだ。作っ  
ては壊し、また作ることで、  
立体的な建築への思考が研ぎ  
澄まされる。だから私の研究  
所では模型はすぐ壊せるよう  
に作る。鉛筆のスケッチ  
も線の上に線を重ねるの  
で、すくなく黒になり、  
私にしか分からなくな  
る。すべてが時間のかか  
る作業だ。  
建築のことばかり考え  
る生活で、この連載でも  
仕事にかかわることだけ  
を書き連ねてしまった。  
仕事以外で、指導や支  
援を頂いた方々、プライ  
ベートで親しくお付き合いし  
ている友人たち。書き切れな  
かった大勢の方々には、力の  
限り建築を作り続けること  
で恩返しをしたい。(建築家)

おわり  
あすから日本ガイシ特別顧  
問 柴田昌治氏